



毎シーズン白鷹町の産直施設に並ぶ人気のトマトがある。その品質は日本野菜ソムリエ協会のお墨付き。同協会が2023年に開催した「野菜ソムリエサミット」で金賞を獲得し、翌年の全国ミニトマト選手権でも入賞した。ただ、栽培しているのは農家ではない。ポンプ関連装置製造を本業とするメトリ(同町、橋本幸雄社長)だ。

養液栽培

同社は産業用ポンプを製造するニクニ(川崎市)の子会社で、半導体や医療分野向けの装置などを手がけてきた。ポンプの技術を生かして16年に農業分野に参入し、23年には農業法人「メトリトライファーム」を立ち上げた。ここで使用しているのが、自社で開発した養液栽培の供給装置だ。養液栽培は、肥料を水に溶かした養液を作物に与えて育

農業用装置



トマトを栽培している自社のハウスで試作中の冷温風装置をチェックする梶田侑哉設計課長 =白鷹町

環境問題意識し開発

てる方法で、施肥管理が自動化され、省力化や品質安定化のメリットがあるとされる。

町内には、製品のPRを兼ねて実証栽培を行うハウスがある。ここで育てているのが冒頭のトマトだ。ハウス内では自社の自動給液装置がフル稼働。天気によって作物に必要な養液量は異なるため、センサーが日光と培土の水分量を計測する。これに応じて必要な養液がチューブを通して、自動的にトマトを植えたポツ

トに送られる。同社いわく、最適な養液を生成し、圃場の隅々まで自動で給液してくれる、施設園芸の頼れるパートナーである。

これを使えば土作りが不要となる。水害に遭った農地、さらには畑がない場所での栽培も可能だ。実際に、川崎市にあるニクニのオフィスビルの屋上でも農作物が育てられている。

適温維持

開発を担う梶田侑哉設計課長(37)は、18年に中途入社した。前職は茨城県のエンジニア

リング会社でエレベーターの乗りかこの設計を担当していた。子どもの誕生を機にUTターンを決意。妻の実家が農家であることから農業への関心もあり、入社につながったという。自然に恵まれた環境と働きやすさも決め手になった。

生育現場に足を運んで施設園芸の知識を深めながら、新たな製品の開発にも挑んでいる。その一つが地下水を活用した冷温風装置だ。くみ上げた地下水を熱源とし、機械から一定温度の風を送る。ハウス内が寒ければ暖房となり、

暑ければ冷房となり、内部の適温を保つ。まだ試作段階だが、用途は農業現場に限らない。工場の冷房装置としても既に引き合いがあるという。

梶田課長は「今の時代は環境問題を無視できない。持続可能な農業の在り方を考えなければならぬ」と強調する。新製品の熱源として地下水に着目したのも、こうした意識が強いからだ。

近年の異常気象は農業に深刻な影響を与え、本県が生産量日本一を誇るサクランボは不作に苦しむ。将来的には、こうした問題の解決につながる製品を開発したい。技術者でありながら日々ハウスに通い、農作物と向き合っている梶田課長の目標だ。

(玉虫秀明)

★メトリ 2001年、ニクニ(川崎市)の子会社として白鷹町で創業。13年にはニクニ社内に営業所となる川崎オフィスを設けた。19年には岡山県に工場を設立。従業員64人。資本金1千万円。本社は白鷹町荒砥乙327。

★梶田 侑哉さん(つぎた ゆうや) 山形大工学部卒。茨城県のエンジニアリング会社に勤めた後、2018年に入社。24年から現職。山形市出身。